大学史資料としてのオーラルヒストリー

和田　華子

はじめに

本稿は、大学史活動におけるオーラルヒストリー収集の重要性について考察しようとするものである。

大学史活動とは、鈴木秀幸氏によれば、大学史に関する資料の調査や収集、それによる整理・保存、さらには利用・応用などの一連の活動である。[1] そして、この大学史活動において、収集された資料が、大学史資料である。[2] その視点にたつならば、本稿で取り上げる、東京女子高等師範学校（以下、女高師と略称）の卒業生に対する聞き取り調査によって収集されたオーラルヒストリー（以下、女高師オーラルヒストリーと呼ぶ）も、まさに大学史活動によって収集されたものであり、大学史資料である。

オーラルヒストリーについては、近年、政治学（政治史）や社会学の分野では、具体的な手法や、活用の実践例が紹介されている。[3] そして、大学史活動においても、オーラルヒストリーの先例は存在する。例えば九州大学では、政治学で行なわれているような、意思決定のプロセスを解明するためにオーラルヒストリーの手法[4]を用いて、大学改革を推進した総長・副学長・幹部事務職員等を対象に、キャンパス移転計画とそれに関連した大学改革に関し、公的文書にはほとんど書かれない意思決定の過程や、「それをめぐる微妙なニュアンス」等を記録している。[5]

また、卒業生や元教職員を対象としたオーラルヒストリーの先例も存在する。京都大学大学文書館では、京都大学における「学徒出陣」に関する調査研究の一環として、一九四一（昭和十六）年四月から一九四五年四月までに京都大学に入学し、軍隊生活を経験した卒業生を対象に、聞き取り調査を実施している。この調査では、「学徒出陣」の経験のみならず、高等学校・大学での活動、余暇の過ごし方などについても聞き取りを行っている。[6]

さらにこの他にも、各大学では、大学史編纂事業等で、元教職員や卒業生に対し、聞き取り調査が実施されている。[7] 本稿で取り上げる女高師オーラルヒストリーも、卒業生を対象としたものである。

さて、このような卒業生を対象としたオーラルヒストリーは、大学史資料において、どのように位置づけることができるだろうか。

寺崎昌男氏は大学史資料を次のように分類している。[8]

①大学運営の歴史を示す公的文書、簿冊、事務記録、その他の文書
②大学内諸機関の議事録、意見書、答申、報告書等
③大学の刊行する年報、要覧、雑誌、新聞、広報紙誌等
④大学卒業生の卒業証書、アルバム、講義ノート、伝記、書簡（特に当該大学に関係あるもの）等々
⑤学長、学部長、教授、職員等の私蔵する文書類のうち、特に大学に関係するもの
⑥大学の設立者、寄付者、卒業生などの関係者の文書
⑦大学の歴史を示す記章、門標、記念品、トロフィー、旗、制服、制帽、印璽等々の物品
⑧大学に関する写真、テープ、ビデオテープ、フィルム等
⑨大学史に関する諸刊行文献

卒業生を対象としたオーラルヒストリーは、この分類上では、完全に一致するものはないが、④の卒業生に関する資料

に近いものといえよう。女高師オーラルヒストリーは、卒業生（学生）の側の視点から大学史を探るにあたり、有効な資料であると思われる。

しかし、大学史やアーカイブズ（記録史料）学の分野においては、卒業生を対象としたオーラルヒストリーの手法や、収集されたオーラルヒストリーを、大学史資料ないし歴史資料として、具体的に、どのように公開・活用していくのか、ということについては、議論の余地があると思われる。

そこで、本稿では筆者がたずさわった女高師オーラルヒストリーの整理過程と、公開・活用の実践例を紹介し、大学史資料における卒業生を対象としたオーラルヒストリーの位置づけを考察したい。

一、女高師オーラルヒストリーの性格

オーラルヒストリーは、何を聞き取りの対象とするかにより、三つに分類できる。一つ目はライフヒストリーである。これは、聞き取りの対象となる人物の人生全体を扱う。[9] 二つ目はテーマオーラルである。その名称の通り、特定の事件や、時代などのテーマを設定して、聞き取りを行う。三つ目は、組織オーラルである。これは、特定の組織や集団の構成員に対し、網羅的に聞き取りを行うもので、その対象となる集団の特質や、意思決定のプロセスの解明などに用いられる。[10]

女高師オーラルヒストリーの場合、調査の発端は、女高師において有志を対象に実施された、一九三九（昭和十四）年の満鮮修学旅行の参加者に対する聞き取り調査であり、当初は、テーマオーラルの形態をとっていた。しかし、その後、桜蔭会兵庫県支部を通じて調査を依頼したり、調査に応じてくれた卒業生から、友人を紹介していただくこともあって、調査対象者が拡大した結果、「一九三四（昭和九）年から一九四七年の間に女高師に在籍した卒業生」に聞き取りを行うことになり、組織オーラルの形態に変化した。

さらに、実際の調査では、対象時期、テーマを限定せず、生い立ちから現在に至るまでについて、お話を伺うことになった。ここに、ライフヒストリーの性格が加味された。

こうして、女高師オーラルヒストリーは、組織オーラルと、ライフヒストリーの性格が強いものとなった。

二、女高師オーラルヒストリーの方法

以上のように実施された女高師オーラルヒストリーの調査方法および特徴について、簡単に言及したい。

第一に、実施方法である。調査の対象となる卒業生には、対面する以前に、あらかじめ、簡単な質問票を提出した。しかし、実際の調査では、質問票は、補助的ないし話が脱線した場合の若干の「経路修正」のツールとして用いられたにすぎず、ほとんどの場合、生い立ちから現在に至るまでについて、自由に語っていただいた。

第二に、インタビューイーの選択である。女高師オーラルヒストリーの調査方法において、特筆すべきは、このインタビューアーとインタビューイーの関係である。インタビューアーは全員、女高師の後身であるお茶の水女子大学・大学院の学生であり、インタビューイーである卒業生にとっては、同窓生であり、後輩であった。ゆえに、信頼関係の構築が、比較的スムーズに進み、内容も豊かなものとなったといえる。

第三に、調査の実施過程で収集された資料の種類である。今回の調査では、オーラルヒストリーの録音媒体（カセットテープ・MDなど）や、テープ起こしの原稿ほか、様々な資料が収集された。例えば、今回の調査の協力者は、東京以外に在住する卒業生が過半数であり、女高師時代の写真・女高師で実施された講習の受講修了証・講義を書き取ったノートなどが、戦災を逃れ、自宅で保管されている場合が多かった。調査ではそれを拝見しながら、聞き取りを行うことがほとんどであった。また、卒業生のアルバム内の写真には、当時、本人の手により書き込まれたキャプションが添えられてい

ることもあった。キャプションの内容は、写真が撮影された状況のほか、様々な種類の情報に及んでいた。例えば、スキー合宿において撮影された写真には、合宿で歌われた替え歌が添えられていた。このように、キャプションにも、当時の学生生活について知り得る多くの情報が含まれていたのである。

これらには、大学に残されていない資料や情報も多分に含まれ、大変貴重なものが多数見られた。よって、卒業生の所有する女高師関係の資料についても、許可が得られた場合には、デジタルカメラで複写した。

卒業生の中には、聞き取り調査の後、所有する資料の寄贈を申し出てくれた方もおり、その結果、写真、書簡（ハガキ）類、モノ資料（勤労動員時に着用したゲートルや、ノートなど）も収集することができた。対面調査には応じられないが、その代わりに、とB5版のレポート用紙二十四枚にも及ぶ、自らの学生生活に関する手記を寄せてくれた卒業生もいた。

三、女高師オーラルヒストリーの整理過程

このように収集されたオーラルヒストリー及び関連資料は、次のような手順で整理作業を行った。その際、今回収集した資料が、今後大学史資料として活用されることを想定して整理を進めることに留意した。

①テープ起こし

②聞き取りを実施した卒業生に校正を依頼

テープ起こしの原稿を卒業生に送付し、録音では聞き取れなかった箇所、人名・地名など漢字表記が不明な箇所や、削除してほしい箇所の指示を依頼した。また、加筆修正の必要がある場合には、適宜それを行ってほしい旨も伝えた。校正を依頼する際には、調査当日に録音したテープ・MDの複製も同封した。

③卒業生から返送されてきた校正原稿をもとに、再校正

④再校正原稿と、保存・公開に関する同意書関係書類の送付

再校正原稿とともに、保存・公開に関し、同意を得るための書類を送付した。送付にあたっては、今回の調査によって得た資料に関する、お茶の水女子大学大学資料委員会(以下、大学資料委員会)の保存・公開の方針を記した文書を同封し、理解を求めた。

まず、資料は今後、大学資料委員会収蔵庫で保管されることを伝えた。資料の利用・公開については、資料を提供して下さった卒業生に同意を得た資料についてのみ行うこと、ただし、調査の際、録音したテープ・ビデオ、テープの内容を書き起こした原稿の原版、資料委員会宛にいただいた手紙なども、内部資料として、大学資料委員会で保管するが、外部には公開しないと説明した。そして、公開について同意を得た資料については、今後、一部ないし全部を、お茶の水女子大学及び附属学校の年史編纂事業、その歴史を紹介する展示会・書籍・論文・ＤＶＤなどの作成に利用したい旨を伝えた。

さらに、「資料の公開・非公開の希望に関する回答書（以下、回答書）」により、卒業生に、保存・公開に同意していただける資料と、保存・公開に関する条件の有無を尋ねた。同時に、この回答書で回答した内容で、保存・公開に同意する旨を記した同意書に署名し、返送していただくことを依頼した。

⑤「保存・公開に関する確認書」の送付

卒業生から返送されてきた回答書と同意書に基づき、「保存・公開に関する確認書」を作成し、これまでの協力に対するお礼状ともに、卒業生に送付した。

⑥ファイリング

①～⑤までの過程で生じた資料を、卒業生ごとにファイリングした。ファイリングにあたっては、卒業生ごとに聞き取り調査の実施概要、オーラルヒストリーの内容概要、実施によって収集された資料をまとめたものを作成し、添付した。

以上のような過程で、整理を行ったのであるが、今後の課題としては、目録化や、検索手段の構築などが残っている。

さて、大学史資料としての活用を想定して、整理を行うという方針をふまえた点について、次の二点を指摘しておきたい。

一点目は、校正である。テープ起こしの原稿については、本人の納得がいくまで、公開を承諾できる形に校正していただいた。その結果、インタビュー形式の原稿が、ご本人により、手記形式の原稿に変換されたり、大幅な加筆修正、削除が見られたりもした。しかし、全てご本人の意思を尊重した。その甲斐があったためか、結果的には、再校正後の原稿については、卒業生のほとんどの方が、今後の公開に同意してくれた。また、校正を依頼した際、特に期限をもうけなかったため、卒業生全員が、非常に丁寧に、校正をしてくれた。さらに、女高師時代の友人に、手紙や電話で問い合わせてくれた卒業生もいた。これにより、新たに追加された情報も多くあり、校正により、より情報の正確性が高まったように思われた。

二点目は、同意書をとったことである。これについては、今回収集したオーラルヒストリーが、単発の調査結果として残されるのではなく、今後、お茶の水女子大学の大学史資料として、幾度も活用されることを期待し、将来を見据えた結果、実施した。調査実施から整理の過程において、ほとんどの卒業生とは、何度も電話や手紙のやりとりをしていたため、調査時よりも、さらに信頼関係が築かれていたと思われるが、それでも、同意書をとるという、事務的な作業を行ったのは、このような理由からであった。

四、女高師オーラルヒストリーの公開・活用

次に、女高師オーラルヒストリーが、その後どのように公開・活用されたかについて紹介したい。

まず、二〇〇四（平成十七）年秋にお茶の水女子大学が一三〇周年を迎えるにあたり、女高師の歴史を通史的に紹介するＤＶＤが作成された。このＤＶＤにおいて、今回の調査で収集された、卒業生所有の女高師での学生生活に関する写真（デジタルカメラによる複製も含む）を使用した。

さらに、調査に協力して下さった卒業生の一人に、ＤＶＤへの出演を依頼、戦時下の女高師を紹介する箇所で、調査でうかがった、愛知航空における勤労動員の経験を、再び語っていただいた。この収録の際、卒業生は、勤労動員に参加する前に、両親に宛て綴った遺書を持参してくれたため、この遺書もＤＶＤ中では紹介した。また、ＤＶＤ内では、卒業生が所有していた勤労動員先で撮影された写真も使用した。この写真は、戦闘帽を被り、ゲートルを巻いた女高師の学生の集合写真である。『お茶の水女子大学百年史』[11]には、愛知航空への勤労動員については、記述が非常に少なく、その実態が明らかにされていなかった。しかし、今回のＤＶＤでは、動員に参加した卒業生の語り、その卒業生が当時書いた遺書、そして当時撮影された動員先での写真という三種の性質の異なる資料を同時に用いることで、戦局が切迫する中で実施された、勤労動員の実態を具体的に、紹介することができた。

さらに、二〇〇六（平成十九）年三月二十三日から四月十一日まで、お茶の水女子大学歴史資料館において、女高師の歴史を、開校以来、ゆかりの深かった皇室との関わりを通して紹介する展示を実施した。[12]この展示では、大学資料委員会や附属図書館・附属学校に所蔵されている皇室関係のモノ資料、女高師の運営資料、写真などを展示したが、あわせて、女高師オーラルヒストリーとその関連資料も使用した。

一九三四（昭和九）年に行われた、香淳皇后の行啓を、大学に残る皇后の令旨や、行啓の様子を撮影した写真などの諸資料から再現するコーナーにおいては、対面調査の代替物として、一九三七（昭和十二）年卒の卒業生から提供があった手記から、この行啓に関する箇所を抜粋し、それをパネル化して展示した（史料一）。また、一九四〇（昭和十五）年に実施された香淳皇后の行啓を紹介するコーナーでも、大学の附属学校に残されていた行啓関係の書類とともに、一九四二

（昭和十七）年卒の卒業生所有の行啓関連の写真の複製物を展示した。写真は、一九四〇年の行啓時に、下賜された御菓子を撮影したものであった。写真の所有者である卒業生は、聞き取り調査の際、「（筆者注:御菓子は）三個いただいたので一個は母校の恩師に一個は母にこういうのをいただきましたよって送りました。」と証言した。展示では、この証言も写真のキャプションに添え、紹介した。

加えて、展示の準備過程においても、女高師オーラルヒストリーが活用された。展示に使用した写真の中に、賀陽宮恒憲王が女高師に来校した際に撮影された写真があったのだが、この写真は撮影年が記録されていなかった。しかし、一九四二（昭和十七）年卒の卒業生のオーラルヒストリーに、在学中に賀陽宮が女高師に来校し、附属国民学校で一年生の相撲を、附属高女にて生徒の運動を見学したこと、その際に、自分は賀陽宮にお茶を出す係を担当し、とても緊張した、という証言があった。附属小学校の国民学校への改称は、一九四一（昭和十六）年であり、この事実と、卒業生の証言により、撮影年不詳であった写真について、ほぼ撮影年を特定することができたのである。

このように、卒業生のオーラルヒストリーにより、大学（運営）側の視点のみならず、学生側の視点からも、行啓や皇族の女高師訪問について、その実態を明らかにすることができた。さらに言えば、女高師に関するモノ資料や、運営側が作成した資料と、卒業生によるオーラルヒストリーをリンクさせることによって、より具体的に、大学史における「出来事」を解明することが可能となったのである。

五、大学史とオーラルヒストリーの関係

最後に、筆者が女高師オーラルヒストリーに関わる中で、大学史とオーラルヒストリーの関係について、考えたことについて若干述べておきたい。

第一は、大学史における生徒・学生の視点の重要性である。大学史を知る上では、大学運営（経営）側が生み出した、大学運営に関する資料だけでは限界がある、ということである。筆者は女高師と皇室展の準備に関わる過程においてそれを感じた。

行啓については、前述の通り、大学資料委員会やお茶の水女子大学の附属学校、附属図書館に、行啓の準備や実施に関する記録が残されている。例えば、一九三四（昭和九）年の香淳皇后の行啓については、大学資料委員会に「開校六十周年記念式書類　昭和九年十月二十九日三十日」というファイルが所蔵されている。このファイルには、行啓当日までの予定を記した「行事予定」（史料二）や、行啓当日の皇后の行動予定を記載した「皇后陛下御行動　大臣、政務次官、次官、参与官及普通学務局長御行動」（史料三）などの記録が綴られている。これらにより、行啓当日の日程を知ることはできるが、実際の大掃除の様子、また教職員と学生が、どのようにして皇后を奉迎したかについては、知ることはできない。

しかしこれらの記録と、行啓を経験した学生の記憶を記録化した資料をリンクさせることによって、より具体的に、行啓の実態を知ることが可能となる。こうしたことは行啓に限らず、愛知航空への動員についても、同様である。

大学史の解明においては、大学運営側の視点から、制度・カリキュラム及びその形成過程を明らかにすることは、重要である。しかし、その運用の実態や、どのように学生に受け止められたかについて、明らかにし、それらと、大学運営側の視点をリンクさせることも、大学史においては非常に重要なのではないだろうか。これらを行う上では、制度・カリキュラムの受け手側、すなわち学生の記憶を記録化したオーラルヒストリーは有効なツールとなり得る。

第二は、時代ごとの個々の大学の存在意義、社会的地位を解明しようとする時には、学生（卒業生）のライフヒストリー全体における大学の位置づけ、そしてそこに果たした役割という視点も欠くことができない、ということである。今回の調査では、女高師における学生生活のみならず、生い立ちから、卒業後の活動、そして現在に至るまでという卒業生のライフヒストリー全体を聞くことができた。それにより、卒業生の個々の人生における、女高師の位置づけを見出すこと

が可能となったのである。

学生の志望動機や、合格・入学に対する周囲の反応は、その時代の大学に対する社会的地位や、評価を映し出す。また、卒業後の活動においては、「女高師出身」であるゆえに、背負わされた、あるいは自らに課した役割が存在した。大学のアイデンティティーを探る上では、学生時代の活動のみならず、学生生活で得たもののうち、卒業後も、卒業生の人生に影響を与え続けたこととは何であったのか、卒業生の個々の人生において、大学及び大学生活が果たした役割とは、どのようなものであったのかについても、明らかにされるべきであろう。[13] そして、まさに、この視点こそ、個々の大学のアイデンティティーや特徴を明確に浮かび上がらせるのではないだろうか。

しかし、これらのことは、大学運営側が生み出した記録には記載されない。卒業生のライフヒストリーを探り、そこに大学を位置づけ、それにより大学の存在意義や、アイデンティティーを見出す、という作業においては、オーラルヒストリーは、有意義な資料なのではないだろうか。

おわりに

以上をふまえた上で、最後に、大学史資料におけるオーラルヒストリーの位置づけを考察したい。

運営側が決めた方針にのっとり、戦略や政策・制度を実施し、組織を運営することが中心となる企業や行政で生み出された資料は、組織運営の視点による資料がその柱となる。大学史資料においても、この視点により蓄積された資料が主柱の一つとなることは言うまでもない。[14]

しかし、西山伸氏が、大学が学生・教職員・卒業生らのさまざまな活動によって成り立っていることにふれ、「『組織運営のための資料』だけでは、大学の軌跡をたどることはできない」とし、多くの大学アーカイブズ（文書館）が、「組織

運営のための資料」のみならず、多様な資料を扱っていることに言及しているように[15]、大学史資料は、組織運営の視点にのみ焦点を当てた資料だけでは成立し得ないのである。

また、前述の通り、大学運営の実態や、大学の社会における役割、アイデンティティーを探ろうとするとき、学生（卒業生）側からの視点は、必要不可欠な要素である。ゆえに、大学史資料においては、大学運営の視点による資料と並び、「学生及び卒業生の活動に関する資料」も主柱の一つとされるべきではないだろうか[16]。

そして、筆者は女高師オーラルヒストリーに関わる中で、この「学生及び卒業生の活動に関する資料」において、学生（卒業生）の記憶を記録化したオーラルヒストリーは、紙媒体の資料や、大学運営に関する資料の補完的役割にとどまらない存在であると感じた。

これまで述べてきたように、大学運営側の資料や、大学史に関わるモノ資料などに、卒業生のオーラルヒストリーをリンクさせることによって、生み出される「ハーモニー」は、大学史における「出来事」をより具体的かつ実態的に明示することを可能にする。そして、大学の社会的評価や存在意義を、卒業生のライフヒストリーにおける大学の位置づけという視点から探る上では、オーラルヒストリーは、重要なツールとなり得る。

もちろん、オーラルヒストリーは、現在から過去に遡った個人の「認識」を記録したものである。他方、大学運営側が作成した資料は、同時代的に大学史の「出来事」を記録したものであり、両者には大きな質の違いが存在する。この質の違いには、注意を要する。しかし、大学史資料は、これらの他にも、モノ資料や写真資料など、様々な質の資料が含まれる。大学史資料は、質の違う資料群の集合体なのである。大学史を探る上では、このような質の違う資料群をリンクさせ、そこから生まれる「ハーモニー」に留意することもまた必要なのではないだろうか[17]。

女高師オーラルヒストリーの今後の課題についてであるが、第一にあげられるのは、継続方法であろう。女高師は一九五二（昭和二十七）年三月に最後の卒業生を送り出した。それを考えるとき、女高師オーラルヒストリーの収集に残され

た時間は、もはやあまり多くないのである。

（史料一）「女高師と皇室」展展示パネルより（K氏手記お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵『東京女子高等師範学校昭和八年～十二月三月　四年間の学生生活の思い出』より一部抜粋）

行事の中で一番印象に残っているのは、二年生（引用者注:昭和八年には行啓は実施されていないため、おそらく二年生であると思われる）の時の皇后陛下の行啓でした。

これは「女高師在学中に一度は皇后様の御姿を拝顔し、お声をきかせていたゞくようにとの計いだ」ときゝました。本校正門から本校玄関迄の通路には新しい砂利がまかれ、その両側に全校生徒が並び、その中央の砂利の上に白布が敷かれ、陛下は正門の所で車を降りられその白布の上をお歩きになりました。玄関前に文・理・家3科から2人づゝが選ばれて、最敬礼の姿勢でお迎えをしました。腰から上を45度にかゞめ両手は膝の所まで下げ、顔は上げて陛下のお顔をみなさいと何度も練習させられびっくりしました。（お顔をみるなんて失礼な行為かと思いましたので）その後陛下やお供の方々は貴賓室に入られお休みになり生徒は全員講堂に入りました。

講堂の演壇の上に金襴の布がかかったテーブルと椅子が置かれてあり、やがて陛下が御入場になり机の前にお立ちになりました。勿論、生徒は全員立って頭を下げて、陛下のお言葉を待ちましたが、なかなかお声がきこえません（まだマイクの無い時代）きゝそこなったのかとソット眼をあげた時、さわやかなきれいなお声が講堂のすみずみ迄ひゞき渡りました（感心してお声に感動して、お言葉は忘れました）。

その後、寄宿舎の方へおいでになり寄宿舎の食堂からグラウンドの生徒達の体操やダンスを御覧になりました。

余話　寄宿舎をお通りになるというので廊下の掃除が大変でした。お通りにならない寮も廊下の床から腰板までお豆腐の汁でふかされましたがお通りになる廊下は特にきれいになるようにと、牛乳でふきましたらピカピカにきれいにはなりましたが滑るおそれがあるとのことでその上に磨き砂をまいて、それでこすらされてるのを見て遠くの関係のない寮の人達は喜びました。

行啓の前日には全員美粧院で顔そりをさせられ、行けなかった人は生徒主事がそって下さいました（私はその一人でした）

陛下から全員にお土産として、虎屋の菓子折一箱づついただきました。

兎に角感激しましたことを覚えています。

その後皇太后さまの行啓がありましたがその時は大したお出迎えもなく、お席も校長が演壇の上、皇太后様は生徒と同じ床の上で、生徒達の授業や実験を御覧になりました。お供の数も少く、皇后様とのちがいに又びっくりしました。お土産に龍村の正倉院モヨウの反物をいただき、これを小さく切って栞にして全員にいただきました。

（史料二）「行事予定」（お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵、『開校60周年記念式書類　昭和九年十月二十九日三十日』）

行事予定

	本校	附属校園	備考
十月二十五日（木）	午後休業	□別大掃除	

同　二十六日（金）　休業、予行演習　　休業、予行演習　　雨天ノ際ハ体操遊戯ヲ除キ実施
同　二十七日（土）　休業、大掃除　　前日雨天ノタメ体操遊戯ヲ実施シ得サル場合ハ当日午前之ヲ実施シ随テ附属校園亦休業ス本校ハ午後大掃除ヲ行フ
同　二十八日（日）　　廿六日、廿七日体操遊戯実施シ得サル場合当日午前之ヲ実施ス
同　二十九日（月）　記念式　　記念式
同　三十　日（火）　祝賀会　　休業
同　三十一日（水）　休業、午後体育競技会
十一月　一日（木）　休業、体育競技会

参照

陳列及諸室準備　自十月二十五日至同二十七日

（史料三）「皇后陛下御行動　大臣、政務次官、時間、参与官及普通学務局長御行動」
（お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵『開校60周年記念式書類　昭和九年十月二十九日三十日』）

開校六十年記念式等次第書　昭和九年　十月二十九日

皇后陛下行啓　　御着　午前九時二十分

奉迎　学校長及大臣、主務局長ハ玄関前ニ
職員生徒、児童総代及来賓総代ハ門内ニ奉迎　（奏楽）
賜謁　学校長先導ニテ御座所ニ御着
大臣、学校長、政務次官、次官、参与官、主務局長及本校勅任
待遇以上ノ職員ニ謁ヲ賜フ
式場臨御　学校長御先導、式場ニ臨御ノ合図ト共ニ一同起立、御着席ト共
ニ学校長御前ニ立チ最敬礼ヲ行フ、職員生徒児童幼児之ニ倣ヒ
同時ニ最敬礼ヲ行フ、学校長開式ヲ言上ス
国歌合唱　総員起立、終ツテ着座
学校長式辞
記念歌合唱　生徒、児童、幼児、起立
令旨　生徒児童幼児ハ其ノ侭起立、他ノ諸員モ起立、学校長御前ニ立
ツ総員拝聴、学校長大夫ヲ経テ令旨ヲ拝受シ、机上ニ奉置ス
学校長奉答辞　職員、生徒、児童、幼児ハ其ノ侭起立、
文部大臣告辞　同上、終ツテ職員着席
生徒総代祝辞　生徒、児童、幼児ハ其ノ侭起立、終ツテ着座
卒業者総代祝辞　卒業者起立
校歌合唱　総員起立終ツテ学校長御前ニ立チ閉式ヲ言上シ最敬礼ヲ行
フ、職員、生徒、児童、幼児、之ニ倣ヒ同時ニ最敬礼ヲ行フ

御休憩　御座所ニ御着御休憩
陳列品台覧　学校長御先導陳列室ニ御臨場陳列品台覧
説明者ヨリ説明ヲ聞召サル
体操遊戯台覧　学校長御先導寄宿舎ニ渡ラセラレ食堂テレスヨリ運動場ニ
行ハルル生徒児童幼児ノ体操遊戯ヲ台覧アラセラル終ツ
テ学校長御先導御退場
御休憩　御座所ニ御着御休憩
還啓　御発午前十一時四十分
奉送　学校長及大臣、主務局長ハ玄関前ニ
職員生徒、児童総代及来賓総代ハ門内ニ奉迎

注

(1) 鈴木秀幸「大学史活動と地方」全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、二〇〇五年十二月。

(2) 大学史活動によって、収集された資料は、他にも大学アーカイヴズ資料・大学資料など様々に呼称されているが、本稿では、「大学史資料」という名称を用いる。

(3) 政治学におけるオーラルヒストリーについては、御厨貴『オーラル・ヒストリー　現代史のための口述記録』(中公新書二〇〇二年四月)及び同編『オーラル・ヒストリー入門』(岩波書店二〇〇七年十月)参照。社会学におけるオーラルヒストリーについては、桜井厚『インタビューの社会学―ライフヒストリーの聞き方』(せりか書房二〇〇二年一月)参照。

(4) 御厨貴「オーラル・ヒストリーとは何か」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店　二〇〇七年十月。

(5) 折田悦郎「国立大学におけるアーカイブの設置とその機能」『京都大学大学文書館紀要』第1号　二〇〇二年。

(6) 京都大学大学文書館『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書　第一巻』(二〇〇六年七月)四頁。聞き取り調査の内容は、同第二巻に収録されている。

(7) 西山伸「『大学アーカイヴズ』の現状と今後」前掲『日本の大学アーカイヴズ』。

(8) 寺崎昌男「大学アーカイブズ(archives)とはなにか」『東京大学史紀要』第四号　一九八三年。

(9) ライフヒストリーについては、桜井前掲書参照。

(10) テーマオーラルと組織オーラルについては、前掲『オーラル・ヒストリー　現代史のための口述記録』及び前掲「オーラル・ヒストリーとは何か」参照。

(11) お茶の水女子大学百年史刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』お茶の水女子大学百年史刊行委員会　一九八四年五月。

(12) この展示については、奥田環・矢越葉子「女高師と皇室―大学資料調査の成果と課題―」『お茶の水女子大学人文科学研究』第四巻(二〇〇八年三月)参照。

(13) 鈴木秀幸氏は、前掲「大学史と地方」において、大学史活動における地方の存在の重要性を主張しているが、その意義の一つとして、卒業生が大学で学んだことを郷里に還元したことを紹介している。なお、明治大学史資料センターでは、地方において、卒業生に関する資料調査を積極的に行っているという(鈴木前掲論文「大学史活動と地方」)。

(14) 森本祥子氏は「組織運営のための文書」を、「いかなるアーカイブズも持たなければならない『核』である」とし、個々のアーカイブズ組織は、この「核」に加えて、独自のアーカイブズ的性格を持つ資料を「+α」として自由に含むことができる、としている(森本祥子「大学組織のアーカイブズ理論の実践の提示への期待」前掲『日本の大

学アーカイブズ』）。

(15) 前掲「『大学アーカイヴズ』の現状と今後」。

(16) 大学史資料における教職員・卒業生の個人文書の位置づけについては、永田英明「大学アーカイブヴズ資料論」（前掲『日本の大学アーカイヴズ』）参照。

(17) 永田英明氏は前掲論文で、大学アーカイヴズにおいて「実物資料」を活用する際の、「それに関わる組織や個人の営みに関する『記録』の保存」と、「それにまつわる人々の『記憶』を記憶化すること」の必要性について言及し、この意味で、実物資料と写真や文書などの記録は、「『歴史資料』として相互補完の関係にある」と述べている（永田前掲論文「大学アーカイヴズ資料論」）。